

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Yoshihiro Mitamura

1978年東京都生まれ。黄綬褒章を受けた名工の根本幸雄氏に師事。2010年に晴れて独立を果たし、現在もさらなる高みを目指して研鑽の日々を送っている。



江戸切子(えどきりこ)

江戸時代後期に西洋のカットガラスを手本に始められた伝統工芸。紋様のモチーフは植物や動物などがある。透明ガラスに色ガラスを被せた「色被せ」による、色地部分と透明部分のコントラストも魅力の一つ。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE



WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットで  
ご覧になれます。

アットホーム明日への扉

検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!



最新号のご案内 好評公開中

No.051 / 高千穂神楽面彫師 工藤 省吾 氏

## 江戸切子職人

三田村 義広 氏

ガラスにまばゆい華を咲かせる。

その衝撃とは？

三田村「親方の作品は、「これも江戸切子なのか」と思うほど独創的だったんです。ガラスの映り込みを生かすなど、粋な遊び心に溢れていて。そんな卓越したものづくりに憧れ、弟子入りを懇願しました。弟子入りを経てから8年間、親方の下で修業を積み、今は独立してデザインから考え製作しています」

繊細なカットが、まばゆい輝きを織りなす江戸切子。優美で鮮やかな紋様を刻み込み、ガラスを芸術品に変えるのは全て職人の手仕事。

東京の下町に生まれた三田村義広さんは、江戸切子の技を未来につなぐべく、日々汗を流す職人。大学時代からものをつくる仕事に憧れていた若者は、ある職人の江戸切子に出会い、衝撃を受けた。

江戸切子の表情は、カットで決まる。ダイヤの回転刃を用いてガラスの器に、菊花や笹の葉、籠目などをモチーフにした伝統紋様を刻み、それを自由に組み合わせることで多様な表情をつくり出す。

要となるのは、「点」を定める技。縦、横、斜めの線が交わる点と点を寸分の狂いも無くつなぐことで、複雑な紋様を刻み込んでいく。一つの点がコンマ数ミリずれるだけで、紋様は台無しになってしまう。

極めて緻密な作業であるにも関わらず、デザインに細かい下絵はない。大まかに引いた線を器の内側から見ながら、その一本一本に全神経を集中し、紋様の華を咲かせていく。黒など濃い色のガラスでは内側から線が見えづらいため、カットを施すのは至難の業という。

紋様を刻み終え磨きを掛ける。器が透けるほど丁寧な研磨を重ねると、

表情豊かな江戸切子が輝き始めた。  
心掛けていることは？

三田村「自分には数ある商品の一つでも、お客さんにとってたった一つの江戸切子です。入魂と言うと大げさかもしれませんが、その一つにできることの全てを注がなければ、常に肝に銘じています」

お子さんが物心ついた時に、「カッコいいものをつくっているんだな」と思われる父親になりたいという三田村さん。その姿を思い浮かべながら、若き職人は今日も努力を続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年9月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE



MORE!!

江戸の粋の継承に全力で取り組む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。